氏 名 （ 本 籍 ）	安原　正貴　（　茨城県　）
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　6770　号
学位授与年月日	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	The Syntax of Causality: An Investigation of Event-Denoting Expressions in English （因果性の統語論：英語における事象を表す表現の研究）

主　　査	筑波大学教　授	博士（言語学）	加　賀　信　広
副　　査	筑波大学教　授	文学博士	廣　瀬　幸　生
副　　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	島　田　雅　晴
副　　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	和　田　尚　明
副　　査	筑波大学教　授		小野塚　裕　視

論　文　の　要　旨

従来から、動詞の語彙的意味と統語構造との間には一定の関係が存在することが観察されてきた。とりわけ事象構造という考え方が、意味と統語との接点をめぐる研究において重要視され、活発に議論されてきている (Grimshaw 1990, Jackendoff 1990, Pustejovsky 1995, Levin and Rappaport 1995, Ritter and Rosen 1998, Borer 2005 など)。しかし、この共通の認識にもかかわらず、事象構造を実際にどのような文法システムとして捉えるかは研究者によって大きく異なる。例えば、Jackendoff (1990), Croft (1991), Levin and Rappaport (1995) などは概念構造のレベルに事象構造を位置付けるのに対して、Ritter and Rosen (1998), Borer (2005), Alexiadou and Schäfer (2006) などは統語構造のレベルに事象構造を位置付ける。本論文は、後者の考え方に立脚しながらも、従来の分析よりもさらに抽象度の高い文法理論を構築することを目指すものである。本論文では、事象間の因果関係は事象を表す要素間の統語的階層関係によって決定され、その関係からそれぞれの要素がしかるべき解釈をうけるとする分析を提示する。

本論文は 9 章からなり、以下のように構成される。

第 1 章では、従来の研究で事象構造がどのように扱われてきたかを概観した後、本研究の位置付けを明示し、さらに目的と意義を述べる。

第 2 章では、事象間の関係が統語構造の階層関係から定義されるという分析を提示し、その理論的・経験的妥当性を示す。従来の統語論的研究では、事象は動詞句（VP）や機能句（FP）によって定義され、例えば、上位の VP は原因事象に対応し、下位の VP は結果事象に対応するなどの考え方が主流であった。そのような分析では、原因事象には外項が関与し、結果事象には内項が関与すると考えることになる。しかしながら、John broke the vase. などの他動詞文の他に、前置詞句が原因を表している The vase broke from the earthquake. のような文も存在することを踏まえると、外項や内項といった項要素だけが事象の因果関係に関わるのではなく、付加詞を含めた要素一般に視野を拡げて、分析の対象とする必要性が出てくる。本研究では、そのような考え方の下、事象を表す動詞および付加詞を統語構造に位置付け、その統語的階層関係

により、事象間の関係が定義されるとする理論を提案する。階層関係により定義される事象間の関係は次の２つの場合が存在する。1）事象を表す２つの要素が異なる階層に位置している場合、それらの事象間には使役関係が喚起され、上位の要素が原因事象を表し、下位の要素が結果事象を表すと解釈される。2）事象を表す２つの要素が同じ階層に位置している場合、それらの要素は同一の事象における詳述関係を表すと解釈される。この提案の経験的妥当性を示すために、本章では、事象を表す要素の共起可能性、事象を表す要素間の順序制限、構成素テスト、使役解釈のスコープ関係、項と事象を表す要素間の叙述関係などを検証する。

第 3 章から第 5 章までは、単一経路制約が関わる現象を扱い、本研究が提案する階層的事象構造分析がその現象に対して自然な説明が与えうることを論じる。単一経路制約とは、一文中に状態変化を表す表現と位置変化を表す表現が共起できないことを規定した記述的一般化である。

第 3 章では、たとえば The butcher sliced the salami onto the wax paper. や John broke the glass into pieces across the table. のように、目的語要素の状態変化と位置変化が表現されていて単一経路制約に違反するかに見えるが、しかしながら実際は文法的である文を取りあげ、なぜこの種の構文が文法的になるかを考察する。結論としては、この種の文は、物体の一部が位置変化をうけるものの、その本体は元位置に固定されている、いわば固定された移動（anchored motion）を含んでいるため、単一経路制約には違反しないと主張する。

第 4 章では、She tied the tourniquet tight around her upper arm. などの文を取り上げ、これらの文は、固定された移動の逆で、空間的な縮小の過程を経て、一つの物体にまとまる変化を表しているために、単一経路制約に違反しないと主張する。

第 5 章では、単一経路制約に違反する事例、および、違反するように見えて実際には違反しない事例を再度取り上げ、本研究の主眼である階層的事象構造に基づく分析を提示する。たとえば John broke the vase <u>into pieces</u> <u>onto the floor</u> <u>with his right hand</u>. という文に現れる３つの前置詞句は、それぞれ異なる統語階層に位置付けられ、その結果、それぞれが「結果」「直接的原因」「間接的原因」の解釈をうけることが原理的に導き出される。

第 6 章では、階層的事象構造を仮定することにより、whistle や rumble のような音放出動詞の特異な振る舞いが自然に説明されることを論じる。音放出動詞を含む The bullet whistled through the air. などの文は、主語の指示物が経路句によって表される移動を行った結果、音が発生するという状況を表す。このように、動詞が表す事象と経路句が表す事象との間には明確な使役関係が存在するが、これは本論文が仮定する階層関係から自然に予測されるものである。

第 7 章では、消滅動詞を含む The magician disappeared into the room. などの文は、主語の指示物の移動がその消滅を引き起こすという解釈になるが、この解釈も経路句と動詞の間の非対称的な階層関係から自然に生じるものであることを論じる。

第 8 章では、位置変化を表す複数の事象間においても使役関係が喚起される場合があることを観察し、このような事例も階層的事象構造分析を仮定することにより自然な説明が与えられることを論じる。たとえば John went <u>into the room</u> <u>through the window</u>. に含まれる２つの経路句は、それぞれ着点および途中経路という解釈をうけるが、ここにも非対称的な階層関係が存在するという分析が有効となる。

第 9 章は本研究のまとめである。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、動詞に加えて、ある種の前置詞句が事象をあらわす表現であるとの独自の観点に立ち、それらの要素を含む事象間の関係を統語的な階層関係に基づいて説明しようとする、たいへん意欲的な研究である。従来の研究では、事象といえば、原因事象と結果事象の２つから成ると考えるのが、常識的な捉え方であったが、本研究はそのような常識にとらわれず、１つの節に３つあるいはそれ以上の（ミクロ）事象がかかわりうるとの考え方を採用している。そのことにより、たとえば John broke the vase into pieces onto the floor with his right hand. という文において、３つの前置詞句がそれぞれ「結果」「直接的原因」「間接的原因」の解釈をうけることが正しく説明できるようになった。とりわけ、onto the floor という本来経路をあらわす表現が、原因（cause）の役割をもちうることを指摘したのは、この研究が初めてであり、高く評価されるべき点である。

また、各種の前置詞表現を階層的事象構造に位置付ける際に、要素間の共起可能性、要素間の順序制限、構成素テスト、使役解釈のスコープ関係など、豊富な経験的事実に基づく議論を行っており、きわめて説得力のある論考となっている。さらに、単一経路制約に関わる現象だけでなく、音放出動詞や消滅動詞に関わる現象も同様の枠組みで扱われており、本論文で提案された階層的事象構造による分析は、十分に広い射程をもつ、優れた説明理論になりうるものであることが示されたと言える。

本論文は、データの収集という面でもたいへん優れている。先行研究で提示されている事例を引くだけでなく、論点の明確化に役立つ適切な例をコーパスから採取するとともに、英語母語話者に作例の文法性を判断してもらうことにより、きわめて興味深い多数の例文を得ることに成功している。この分野の今後の研究において、著者独自の分析とともに、この豊富なデータも貴重な存在となることと思われる。

ただし、今後に残された課題がないわけではない。本論文は、統語的な階層構造に基づく説明を行っているが、仮定されたその構造が真に妥当なものかどうかを、最近の理論的研究の進展や構文研究で明らかになってきている様々な経験的事実に照らして、さらに検証していく必要がある。また、英語の強い結果構文（strong resultative）や one's way 構文に出現する前置詞句は、本論文の枠組みではどう分析されるのか、out of curiosity などの精神的動機付けを表す前置詞句も原因事象の表現と見なされるのか、などの問題はさらに掘り下げて考えることが必要であろう。

以上、若干の課題は残るものの、本論文は事象構造研究の分野において、独創的でかつ説得力のある分析を提供するものであり、優れた研究成果であることは間違いない。

2　最終試験

平成 26 年 1 月 24 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。